

芸術と社会の関わりを強めるために — 地域の音楽活動を実例に —

Cementing the Relationship between Art and Society — Through a Local Music Project —

(2013年3月31日受理)

小野 文子 廣畑まゆ美*
Ayako Ono Mayumi Hirohata

Key words : 音楽, 社会, マネジメント, 山田耕筰, 企業, 地域

要 旨

2010年に開催された瀬戸内国際芸術祭には「海の復権」という極めて社会的なテーマがあった。今となっては美術館で有名になった瀬戸内海の島々だが、かつては公害や人権の問題で悩まされていた。そこに国境, 言葉, 年齢, 趣味嗜好といったバックグラウンドを超えて各地から人が集まり, 現代美術を通して現代社会の問題に関わることで, 祭典に会場した人々は島の旅を楽しみながらそのテーマが発信するメッセージを持ち帰った。一方, 音楽のここ数年を見ると, 極めて主観的で狭小な視野でアウトプットしていると感じる。要は社会という観点への意識が低い。この現状がなぜ問題なのか, 文化をさらなる成長に導くには何が足りないのかを, 現状や先人の行い, 身近な音楽活動の実例を題材に考察していく。

1. 執筆背景

(1) —瀬戸内国際芸術祭を経験して—

2010年, 財団法人直島福武美術館(現, 公益財団法人福武財団)に就職した筆者(廣畑)は, 財団初の試みである「瀬戸内国際芸術祭2010」を経験する。主催は香川県の瀬戸内国際芸術祭実行委員会だが, 総合ディレクターに財団法人直島福武美術館財団の福武総一郎氏が就任し, 財団職員もそのイベントに大きく関わることになる。瀬戸内海に浮かぶ7つの島が舞台となり, 現代美術作品が町の中に溶け込むこの催しに, 来場者は旅客船での移動, 作品鑑賞, 地元民との交流, 食事などを通し, 日常生活から離れた時間を体験する。この芸術祭は2010年7月20日から10月31日まで行われ, 期間中の合計来場者は約93万8千人であった。しかし, 人々の興味関心を引く魅力的な施設では入館制限がかかり, パスポート(スタンプラリー型チケット)を購入しても入館でき

ない来場者が続出した。それを憂慮した実行委員会・各関係施設は, 一部施設のパスポート有効期限を芸術祭終了後2ヶ月間延長し, 12月までとした。来場者は年末まで途切れることなく続いた。会場のひとつである地中美術館においても, 連日入館の上限人数をはるかに上回る来場者対応に迫られた。直島の最多来場者数は9月19日の6,404名であり, これは島人口のおよそ2倍の数字である。来場者がそれぞれの思いや期待を抱えて島に足を踏み入れ, 作品と向かい合い, 物理的な条件(交通機関の不便さ, 来場不可能, 混雑)に困惑しながらも, 非日常的な体験を持ち帰った。

日々来場者と関わり, 対峙することを通して, ここ数年における音楽の大規模イベントの有無, について思考した。音楽における聴衆の属性は音楽ジャンルによって大きな偏りがある。一方, 現代美術は年齢, 性別, 住んでいる地域, 国籍, 目的意識なども様々な人々を人口減少の一途をたどる島に集めた。これはひとえに美術の力

*公益財団法人福武財団

だけではなく、島や地域、土地に暮らす人々など、様々な要因が人を引き付けたのだろうが、来場者に感動や安らぎ、特別な体験、考えるきっかけ、自己との対峙の機会など、何かしらの気づきや思い出を与え、極めてコンセプトで社会的な祭典となった。この芸術祭は「海の復権」というテーマが掲げられ各企画が進行した。現代美術を通した一つのイベントが全体として文化的なメッセージを発信したのである。また、財団法人直島福武美術館の理事長福武総一郎氏が現代美術に焦点を当てていることを『直島 瀬戸内アートの楽園』（新潮社、2009）の中で下記のように語っている。

（現代美術の作家は）「現代社会の問題や課題、矛盾をひとつひとつの作品にこめているのだと思います。」

ただ人を集めて作品をよい、悪いと鑑賞させるのではなく、その奥に見え隠れするレジスタンスを感じさせ、社会を見つめ直す、というコンセプトのもと現代美術が媒体として選ばれている。

この芸術祭は明確なコンセプトの下で民間企業がけん引し、行政と連携し、地域の理解をえることでできあがった極めて社会的影響力のあるものである。芸術作品を選定するところから、祭のもつ趣旨に沿ってマネジメントしており、名の通った大物アーティストも芸術祭のメインテーマ「海の復権」の意図を理解していなければ参加することはできない。作品はその多くが公募制である。この作家を選定する段階から主催者は来場者に持ち帰ってもらいたいメッセージを明確にしている。

瀬戸内国際芸術祭もその類であるが、美術では「アートマネジメント」という言葉が積極的に使用されている。NIRA1998年の報告書で、アートマネジメントは「芸術と社会（public）の出会いをアレンジする」と表現されている。（Byrnes, William J. “Management and the Arts” 1993年）

特に音楽は創造的な活動であるにも関わらず、扱う人の認識や世間での捉えられ方で限られた人にだけ許された文化になりがちである。例えばロックフェスティバル・著名なミュージシャンのコンサートなどは、演奏者のカリスマ性によるところが大きい。その奏者の魅力に共感する人だけの狭小な視野に陥りがちな小さなコミュニ

ティである。そのほかクラシックやジャズ、音楽のジャンルごとに形式があり、やはりそれぞれがコミュニティ化していて対象者が限定される。

瀬戸内国際芸術祭を通して、音楽に関わる一人ひとりが自分たちのアウトプットと社会の関連を考えマネジメントしていく必要があることを強く感じた。そこまでの視野の広がりがあるって初めて文化は成長していくのではないか。その重要性を先人のありかたや地域活動の実例をもとに考察し、一つの提案としたい。

（2） データー2010年イベント来館者数よりー

芸術祭期間中、音楽イベントや講演会、シンポジウムも開催された。その数は全33公演。総来場者数8451名であった。

来場数は芸術祭終盤に向かうにつれて増加し、それに伴いイベント参加者も増加した。会期の終了間近にはどの会場もほぼ満員状態で行われた。

目的意識を持って参加する人、通りかかって参加する人などその様子は様々であったが、イベント会場は盛況していた。各コンサート、芸術祭のメインテーマに関連し、音楽を通してその場ならではのプログラムを実践していた。表1）は芸術祭期間中に行われた各種イベントとその集客数である。

表1）2010年芸術祭期間中開催の音楽イベント

島名	日にち	内容	来場者数
女木島	8月1日	喜びの島～女木島I 掛谷勇三ピアノコンサート	37
女木島	8月7日	喜びの島～女木島II 鈴木謙一郎ピアノコンサート	50
高松	8月7, 8日	MUSIC BLUE 高松ジャズ2デイズ	650
豊島	8月14日	豊島音楽祭ブレインイベント	13
豊島	8月18, 19日	三田村管打団?	115
高松	8月21, 22日	MUSIC BLUE	320
高松	8月22日	ART SETOUCHI 街クラシック in 高松 瀬戸フィルハーモニー交響楽団	100
直島	8月28日	直島女文楽・オペラ×文楽人形×α 「この海を越えて～蝶々さん」	450
女木島	8月28日	喜びの島～女木島III 北住淳ピアノコンサート	70
高松	8月28, 29日	MUSIC BLUE	300
高松	8月29日	ART SETOUCHI 街クラシック in 高松 瀬戸フィルハーモニー交響楽団	100

大 島	9月4日	音が絵になり 絵が音になり	440
高 松	9月4日	まちうたコンサート	100
高 松	9月4, 5日	MUSIC BLUE	380
直 島	9月11日	直島女文楽	95
豊 島	9月11, 12日	豊島音楽祭プレイベント	200
高 松	9月11, 12日	MUSIC BLUE	380
高 松	9月12日	ART SETOUCHI 街クラシック in 高松 瀬戸フィルハーモニー交響楽団	100
高 松	9月18, 19日	MUSIC BLUE	360
豊 島	9月19, 20日	三田村管打団?	70
高 松	9月23日	MUSIC BLUE	100
直 島	9月25日	直島女文楽	100
豊 島	9月25日	ノリがたゆたう音楽会	57
高 松	9月25日	まちうたコンサート	100
高 松	9月25, 26日	MUSIC BLUE	350
高 松	10月9, 10日	ミュージック BLUE コンサート In マザーポート高松	1600
女木島	10月10日	<MEGI> (Music and Electrically Generated Information)	114
高 松	10月16日	ミュージック&リズムス 「海の道=列島をつなぐ島の歌壇 =」	400
高 松	10月16日	まちうたコンサート	100
豊 島	10月18, 24日	豊島音楽祭	200
小豆島	10月23日	肥土山農村歌舞伎	600
小豆島	10月24日	中山農村歌舞伎	300
豊 島	10月30, 31日	三田村管打団?	100

大島には国立療養所大島青松園があり、ハンセン病入所者の日常生活の介助や日常生活の支援やハンセン病を正しく理解するための啓発活動が行われている。そのため島に上陸する際は、国立療養所大島青松園の管理事務所に届け出る必要がある。瀬戸内国際芸術祭期間中も大島は積極的に芸術に関わる方針ではなく、ハンセン病を正しく理解してもらうため、という方針で関わっていた。そのような関わり方をしている大島であるが、「音が絵になり 絵が音になり」コンサートは440名の入場者であった。直島「女文楽」、小豆島「農村歌舞伎」なども450～600名の入場者であった。一方、女木島ではC.ドビュッシー作曲「喜びの島」をメインの使用曲としてシリーズ化したクラシックのピアノコンサートが、期間中3回行われた。女木島は船の便数が多く、深夜まで船舶が運航しているため渡島しやすいが、会期中の早い時期

に行われたこと、屋内のコンサートであることなど様々な要因はあるが、3回のコンサートそれぞれ、37名、50名、70名の入場者であった。

その場所、その瞬間でしか感じるできないもの、その会が発信するコンセプトが明確であることが人を集める要因であることが伺える。音楽と社会の関わりを強めるためには何が必要か。次章から考察する。

2. 調査内容

- ・書籍による音楽におけるマネジメント思考の調査
- ・書籍による音楽とマネジメントの実例調査
- ・アンケートによる地域で音楽に携わる方々への意識調査

3. 現状分析・資料調査

(1) 音楽とアートマネジメント

【1】アートマネジメントの観点から見た音楽の実情

瀬戸内国際芸術祭は企画の目的を民間、行政、地域が共有し、次々に上がる構想をいつ、だれに、どのように、と考案進行させていた。仮説を立て、実施、検証しながら業務を進行させることで、その構想の結果が顕著となり、今後の方針や次回予算、関連事業への出資の話などがスムーズに決定することができる。結果を出すためには目標が必要である。

日本にはアートマネジメント学会という学会があり、各地区に分離して年に一度大会が開催されている。学会代表はアートマネジメント(arts management)について、

「アートを鑑賞者へと運ぶ方針を立てて、これを経済的にうまく行うこと」

と述べている。美術の分野では各大学や研究機関がすでに様々な研究に取り組んでいる。音楽においては昭和音楽大学のアートマネジメント学科の活躍が顕著である。学生がいつ、どこで、だれに、なにを、なんのために、と要素を出し、つぶさに計画を練って教授にプレゼンテーションを行い、コンサートをつくりあげる授業が行われている。実地経験を通して、ひとつのコンサートが

できあがるまでに必要なこと、かかる時間、お金、関わる人のことを総合的に学ぶことができる。

徐々に音楽をマネジメントする活動も精力的になっているものの、美術分野と比較すると研究数は少なく、専門的に学べる場所も少ない。芸術活動にアウトプットは必ずついてくる。そのアウトプットに対する方法論などが音楽楽部学生の必修科目にはなっている、というような学校はまだ少ない。現代社会の問題やニーズを読み取り、文化を通してどのようなことを目指すのか？その目標にたどりつくためには何をすればよいのか？と専門とは別領域のこととリンクさせながら考えることは学生にとっておそらく普段の生活からスムーズにこなせることではない。マネジメントに関しては完全に個人の力量、縁、自己学習に任せている状態にはいささか問題があると考えている。

【2】マネジメント観点の欠落例

経済的な余裕がないと文化的な面にかかる費用が一番に削られる。2009年度に行われた行政刷新会議事業仕訳が記憶に新しい。文部科学省の文化関係事業で予算が縮減され、いくつかの芸術関連事業が事業として扱われなくなることが決定した。ひとつは芸術関係の財団法人運営についてである。これは「文化の展開という数値では図れない事業の必要性は否定しないが、芸術・文化に国がどのように税を投資するか具体的な説明がなされておらず、効果説明が不足している」という理由から予算要求の縮減を招いた。もうひとつは3区分されていて、芸術家の国際交流、伝統文化子ども教室事業、学校への芸術家派遣である。どの事業も定例化し、実施内容がどのような効果をもたらすのかを十分に検証できていなかったために、国の事業として扱われなくなった。国が認めないものは社会でも認められない。アウトプットを行うに当たって必ず必要になるのは運営資金である。主催者の自己負担で行われるものもあれば、自分たちでは資金繰りができないような大きなものもある。後者の場合は、資金提供をしてくれるスポンサーに依頼する。1【1】で紹介した学生の例のようにいつ、どこで、誰に対して、なんのために行うのか、ということプレゼンテーションし、共感してもらえるポイント（スポンサーにとっては利益があると判断出来る要素）があれば、資金を提供

してもらえる。しかし、そこで国に予算を削減された事業であるとすれば、社会的な信用度が低下し当然費用対効果が低くなるため、スポンサーの獲得は難しくなる。費用面における苦勞とすり合わせながらの運営により、事業の活発さも低下してくる、という負のスパイラルに陥りかねない状況となってしまう可能性がある。

【3】マネジメント遂行に必要な思考

では、どうすれば社会的な信頼を確保できるのか？企業においてよく使用される言葉で、PDCAサイクルというものがある。第二次世界大戦後、品質管理を構築したウォルター・シューハート (Walter A. Shewhart)、エドワーズ・デミング (W. Edwards Deming) らが提唱した。このため、シューハート・サイクル (Shewhart Cycle) またはデミング・ホイール (Deming Wheel) とも呼ばれる。英単語の頭文字をとってつなげたものだが、それぞれには下記のような役割がある。

- 1) Plan: まず目標を設定し、それを具体的な行動計画に落とし込む。
- 2) Do: 組織構造と役割を決めて人員を配置し、組織構成員の動機づけを図りながら、具体的な行動を指揮・命令する。
- 3) Check: 途中で成果を測定・評価する。
- 4) Action: 必要に応じて修正を加える。

1から4まで実施したら、また1に戻り4まで実施…というように、このサイクルを回すことによって、業務を継続的に改善することができる。

事業仕訳で廃止された理由は、まさにこのPDCAサイクル実施の怠りが影響していると考えられる内容である。発案者、担当者は常に振り返り、どのような効果があったのかを考えなければならない。効果がないなら辞めるなり、方針を変えることもできる。マネジメントの観点をもち、仮説を立てる上では、いつ、だれに、なぜ、どのように、と考えるが、自分の直感や感性だけで仮説を立てることはできない。様々な因果関係を用いる中で必然的に他社との関わりを考えるようになる。日頃からこのようなプロセスで実施されていれば、仕分けの結果も変わったかもしれないし、通常行われる各活動がより活気あふれるものになっていたのではないかと推測する。行われている形式に満足し、ルーティン化しないよう、

アウトプットする側はいつも思考をめぐらせて自身の企画を实らせるための努力を行わなければならない。

(2) 社会性をもった音楽の実例—大正初期の音楽界を題材に—

【1】音楽が抱える問題点に気づいた山田耕筰

豊かになった現代社会は問題に気づきにくい環境だと考える。通信、運輸、交通も発展に発展を遂げ、文化は日々湯水のようにあふれている。それを能動的に吸収しようと思わずとも、待っていれば自然と様々な文化に出くわす。そうして飽和した文化は人が日常で自然と取捨選択している。そこで選ばれるためにはアウトプットする者が今なぜ社会にその文化が必要なのかをアピールしながら活動することが求められ、そのアピールがより多くの人を引き付ける可能性の要素になる。選ばれなかったものは一過性の娯楽となるのみだ。作曲家、山田耕筰がいまなお語り継がれるのは、そのたぐいまれなる才能は勿論のこと、なぜ自分の活動が世の中で必要なのかを常に考えながら行動していたからではないか。

山田耕筰が大きな志をもち、精力的に活動を行っていたのがドイツ留学から帰国した1914年から1917年にかけてである。このころ文学では「白樺」、美術では「フェウザン会」、婦人の芸術活動「青踏社」のように社会では優れた才能を持つ人たちが集まり、目的意識を統一しながら、自身の活動と社会の関わりを模索しながらアウトプットしていた。山田はこれらの活動を横目に当時の音楽界を下記のように振り返る。

「そのころの日本の楽界は全くゼロにひとしかった。上野の音楽学校と宮内省楽部にオーケストラらしいものはあったが、芸術と呼び得るような音楽は皆無だった。」

1913年の音楽文化を探して出てきた情報は確かに少ない。一番目立つ内容で、松井須磨子と島村抱月が芸術座を旗揚げし、『復活』（トルストイ原作、島村抱月訳）を公演。カチューシャ役が大当たりし、松井須磨子が人気女優となった。彼女が歌った主題歌『カチューシャの唄（復活唱歌）』（島村抱月作詞・中山晋平作曲）のレコードが当時2万枚以上を売り上げるヒットとなっている。（※ちなみに中山晋平は東京音楽学校のピアノ科を卒業

している。）いわば現代のポップスのような位置づけの音楽なのだろうか。こうみると、何を持って音楽とするのかその基準もあいまいに思えてくる。ただこれは次回以降の課題とし今回は触れないこととする。ひとつ言えることは、山田が求めるような日本全体を震撼させる西洋のオーケストラのような規模、質、深みのあるものが日本に存在しなかったことは大正時代初期の音楽年賦などからも明らかだ。自らの留学時代を振り返ってこうも称している。

「・・・(略) バッハやモーツァルトのような楽聖によってつちかわれた豊かな伝統をもっているドイツをみると、そうした高い伝統の背景もなく、音楽的遺産のかけらすら受け継いでいない私のようなものが (略)・・・」

本場の音楽を体感し、受けたショックも大きかったのは勿論、日本の音楽界は発展途上ということ象徴的に提言している。東京音楽学校で幸田延、幸田幸、滝廉太郎などに続いて選抜されて留学している自分でもこのレベルでしかない、つまり日本全体を見れば取るに足りない状態だという暗喩にも聞こえる。ここで日本の音楽界に関して問題意識をもちかえったことがわかる。

【2】具体的な実行策とその成果

1914年、留学の援助をしてもらっていた三菱財閥の総帥岩崎小弥太が組織した東京フィルハーモニー会管弦楽部の首席指揮者を命じられ、山田がベルリン時代に作曲した日本人初となる交響曲「かちどき平和」を演奏した。しかしながらこの活動は約一年余りで終焉を迎える。山田は自身の自伝連載（日本経済新聞社編『私の履歴書』日本経済新聞社、1960年）で下記のように振り返る。

「楽団の仕事はしかし、私の経営の拙さと、時代に早過ぎたため、約一年余でやめなければならなかった。」

時代のニーズや経済観念の必要性を懸念した発言が読み取れる。実際、これには山田の女性問題に激怒した岩崎氏の援助が断られたことが大きく影響しているという事実も忘れてはならない。パトロンとして音楽の興隆を目指し、音楽の可能性に企業が巨万の富を投じる。そこ

には社会的な信用も重要な要素であることが分かる。この後、山田は金策に苦しみながらも社会に出て2年のうちに起こした失敗をばねに、日本の交響楽運動に精力的に取り組んだ。日本の交響楽運動が停止しないために、アメリカのカーネギー・ホールでデビューすることを志したのだ。確かな知識と技量を身につけるという意味に加えここに着目したのは、アメリカの楽団が国の援護なしに民間で経営しているというところからだ。渡米することでその実情に触れ、一富豪の富ばかりに頼るのではなく、大衆を友として立つ音楽のありかたを目指そうと考えたのである。こうして日本の音楽の興隆を常に念頭に置き、社会の実情や経済の仕組みなど多方面にアンテナを張り巡らせ、自身が目指すものと社会ニーズをすり合わせていった。

山田が残した功績の中でも、留学後の3年間は特に活動規模が大きい。時代を超えて、本来は西洋の形式だったはずのものがまるで日本の昔からあったもののように童謡や唱歌として存在することになったり、交響曲が浸透したりした。私たちの教育をはじめとする生活になじんでいるのは、彼の日本の音楽の在り方における問題意識と独自の発想による成果物であると考ええる。文化をマネジメントした成功例ととらえることができるのではないかと考える。

山田の例だけでなく、この時代の音楽は日本全体の音楽文化にはどのような問題点があり、なぜ音楽が社会において必要なのかを明言しながら様々な実行項目に取り組み、一部の層でなく、教育、社会と連動しながら日本全体にメッセージを発信するものであった。また、得た利益を文化で国民に還元し、その過程で文化レベルを発展させ、欧米諸国に追いつこうとしていた「企業」の方向性と目的が一致していたというのも、音楽が経済的な支援を受ける上で大いに重要だったと考えられる。山田耕筰と同じ時代を生きた朝日麦酒の山本為三郎（1893年4月24日 - 1966年2月4日）は1955年、東京交響楽団理事長に就任している。任期期間中「アサヒビールコンサート」を開催しているが、その開催理由を以下のように語っている。

「・・・(略) 私はこれは事業会社が社会から受けた恩恵をふたたび社会に還元するひとつの方法だと思ってい

る。」

企業は自社の利益がないことに費用を投じない。社会から受けた恩恵に対して、音楽という方法を使って還元することで、その還元した相手を再び自社の顧客にするという流れだろう。しかしそこで社会が音楽に興味を持っていなければならぬ還元の意味がない。このアサヒビールコンサートのころはまだ西洋の音楽が物珍しかった時代だ。聴衆、企業、音楽家、どの視点からしても有益であった。現在も企業が音楽活動を推進している例は少なくないが、文化も欧米諸国に引けをとらないほど豊かな状態の現代社会において、ただ聴けるだけでは聴衆は満足しないし、そうとなれば企業はスポンサーにはなり得ない。印刷業界の大手、凸版印刷株式会社は自社がコンサートホールを構えている。次世代の事業においてコミュニケーションをキーワードにしていること、印刷と楽譜の関わり等の因果関係から定期的に自社主催のコンサートを開催している。活動自体は精力的に行われているし、企業側の目的意識も明確である。しかしながら、当時のように音楽が誰でも気軽には聞けないものではなくなくなってしまった現在では、単純な娯楽の提供になりうる。また企業側の方針は明らかでも、行われる音楽文化がどのように成長していくのか、ということには注力されていないことも伺える。先人の事例や今日の姿から、音楽が目指すこの先の姿を音楽をアウトプットする側が共通認識としてもち、自身の活動の意味を社会とリンクさせながら考えることが求められていると考える。

(3) 音楽イベントを企画する人たちの意識調査

山田耕筰らは日本における音楽文化の成長を目指して活動していた。そうすることでそれに呼応した企業は資金を投じたり、聴衆はその音楽に共感したりし、結果、目指していた音楽の在り方に近づくことができた。目的意識と広い視野、時代のニーズをキャッチすることが必要であることが分かる。

では現代社会において音楽活動に携わる人は、どのようなことを考えて活動を実施しているのだろうか？地域コンサートの実行委員会長を務めている2名の20代後半男性に意識調査を行った。彼らが行っている活動の現状を照らし合わせながら、その解答を見てみる。そこにマ

ネジメントの思考や、企画の意図が明確であるかをさぐることと、結果が伴っていない場合は何が問題となっているかを考察する。表2)にアンケートの結果をまとめた。

表2) 音楽イベントを企画運営する方々への意識調査

質問内容	回答者A	回答者B
1. あなたは音楽科などで学んだ経験がありますか?	なし	あり
2. Yesと答えた方にお伺いします。音楽を学んでどれくらいになりますか?		13年
3. 専攻は?		ピアノ
4. 1でNOと答えた方、あなたは何をきっかけに音楽に興味を持つようになりましたか?	中一で尾崎豊を聞いてから	
5. Noと答えた方に。音楽の演奏やイベントに携わってどれくらいになりますか?	5年	

■以下両者にお伺いします。

6. あなたは音楽科で学んだことや音楽に携わった経験を社会の中でどのようにいかしたいですか?または活かしていますか?	たくさんの人とつながっていききたい	音楽療法の勉強をしたので、介護の現場で生かしています。
7. 6の実現のために具体的に実行したのはどんなことでしたか?	イベントへの出演、手伝い	現場での継続した月3回の療法と、職員全員参加のプログラム作り(音楽療法を職員全員で盛り上げていく意識作りのため)
8. 実行した具体策は成功しましたか?結果なども含めて具体的に教えてください。	?	全国老人福祉施設協議会の全国大会で音楽療法の研究を行い賞をとった。 リコーダー、オカリナなどの合奏練習や出し物練習、音楽療法中の利用者の記録などを行った。
9. あなたが音楽を続けている目的は?	幸せの中の一部だから	相手の前で音楽で自分の本質を伝えることができる
10. 音楽を仕事にしようとおもったことはありますか?仕事は音楽関係ですか?	なし	ある(現職は介護士)
11. コンサートなどに出演したことはありますか?	あり	ある
12. あると答えた方に、その出演で演奏するにおいて大切にしていることはなんですか?	歌詞を間違えないこと	演奏プログラムが来てくれるお客様にあつていて、また来たいと思えるような演奏の質、演出は大切にしています

13. コンサートやイベントを企画したことはありますか?	ある	ある
------------------------------	----	----

■以下あると答えた方への質問。

14. その企画の趣旨を差し支えない範囲で教えてください。	子どもたちや老人が演奏会を通してプロと触れ合えるように	レベルのあるクラシック、お客様になじみのある曲、笑いの要素、参加型で子どもから大人まで楽しめるプログラムを意識しています
15. 企画をしたとき、どのようなゲストを想定しましたか?またとくにメッセージを伝えたいゲスト層のイメージはどのようなものでしたか?	普段聞くことのできないプロの演奏をプログラムに組み込む	開催地域の中心となる属性に合わせて企画している。高齢者には唱歌、歌謡曲。10-30代にはポピュラー。

■以下両者への質問。

16. あなたが最近キャッチした音楽にまつわる重大ニュースを教えてください。なければ結構です。	バズーカー高校生RAP選手権 RAPが熱い	なし
17. あなたが日頃よく聞く音楽はどんな音楽ですか?具体的な歌手名やジャンルなどなんでも結構です。	コブクロ、奏基博などアコースティック系	Mr. children, バンブオブチキン, ゆず, グリーン, いきものがかり
18. なぜその音楽が好きなのですか?	自分の生声を生かせる楽器がアコースティックギターだから	バンドやアーティストの詩の世界、音楽性が自分の表現したいこととあっているから
19. 現代社会の様々な問題に音楽がアプローチできることはあると思いますか?あなたの考えを聞かせてください。	チャリティーイベント	少子高齢化であり、高齢な方への心のケアやコミュニケーションツールとして、音楽活動を楽しむ場を継続的に作ることで十分にアプローチできると思う
20. 音楽が抱える問題点があるとすれば、それはなんだと思いますか?	?	耳が開かない型、目が見えない方、音楽が嫌いな方がどのように満足するかが課題

回答者Aが実施するのは、地域のこどもとプロの演奏家を共演させ、プロの演奏に触れさせることで音楽をより身近に感じてもらえるようお願いを込めたプロジェクトだ。年に1度開催されており、2012年で12回目を迎えた。教育委員が運営を援助しており資金面での苦労はない。地域の方に向けて発信されておりホール満員の200名程度の集客がある。当初この企画を担当していたのは別の方であったが、Aが出演者として関わることを繰り返した結果、実行委員会に入ることになり、今に至っている。コンセプトは当初から変更しておらず、前実行委員長の

意思をそのまま引き継いでいる形である。回答者Bは音楽科で学ぶ過程で演奏を経験し、コンサートの企画を行うようになった。毎回季節やゲスト属性にあった構成内容のプログラムを組み、半年に1回程度演奏会を開催している。数々の方の御厚意や、出演者の負担で資金面をやりくりしている状態。出演者が多いが共同作業が多く、練習不足状態でアウトプットが行われることがしばしばある。対ゲスト視点やコンセプトはしっかりしているが、フロントとバックの仕事が少ない出演者が兼ねるため、マネジメントが行きとどいていない。平均集客状況は70名程度集客可能なホールに30名程度である。

A、Bの共通点としてあげられることは音楽に対する熱意。音楽を続けている理由は極めて主観的だが、そこに幸せを見出している。自分が感動しないものを人に伝えることはできない。しかし、実際の企画段階（出演時に大切にすること、企画の趣旨、メッセージとの向き合い方）においてだんだん相違が出てくる。Aは企画時における諸問題を自分の問題としてとらえて課題設定をしている。コンセプトは過去にあったものを踏襲した内容で、彼自身が何か問題を捉えて解決しようというスタンスはない。一方Bは聴衆を意識するとともに、伝えたいことを明確にしていくプロセスを踏むようにしている。現代社会における音楽に対しても、Bは従事する介護の仕事で出会った諸問題と音楽のマグネットポイントを見つけ、音楽の可能性を模索している。

彼らの活動はそれぞれにメリット・デメリットがある。Aの活動は定例化していて運営の苦しみは特にないが、コンセプトを次世代リーダーが理解して発信していかなければプロを召喚したところで瞬間の娯楽にしかなり得ない。資金面が苦しくなったとき、その必要性を検証できなければ予算削減の対象にもなりうる。またBのようにコンセプトは明確でも発信内容の質が磨かれたものでなければ聴衆の満足を得ることができずコンセプトが伝わらない。いつ、どこで、だれに対して、何のために、どのくらいの予算がかかるのか、どんな仕事が必要かなどを常に意識し、自身の計画をマネジメントしていくスタンスが必要だ。

地域の音楽活動においてはまだコンセプトを明確にしたり、社会との関わりを考えていったり、活動をマネジメントしていくスタンスが根付いているとは言い難い。

可能性はあるので、ここを引き出すことが重要になると、企画に携わる関わるメンバーの問題意識と熱意が重要である。

4. まとめ・今後の課題

音楽は自分と音と真摯に向き合う、極めて主観的な学問だ。感覚的で答えのないものに論理を重ね合わせることは、相反することの接合点を見つけるかのような作業である。しかし、少なくともどちらに偏ってもその文化が成長することはない。音の心地よさは人それぞれである。その微妙な変化をとらえてアウトプットするこだわりの部分、いいものはいいという直感は重要だ。ただ、それを世の中に発信するには費用がかかる。費用を得るためには必ず論理と根拠が必要である。マジョリティへの反応を優先し、マイノリティの評しか得られない内容をあきらめる必要があることもある。この感覚的な要素と人を納得させる論理と根拠を持ち合わせたとき、音楽と自分、という視点に社会が加わり、その音楽が支持する人をあつめ、資金をあつめ、文化を成長させる基盤をつくりあげるのではないだろうか。現状、社会と音楽の関わりは極めて薄い。音楽分野にとどまらず視野を広く持ち、そのあり方をマネジメントしていくことは必要不可欠である。

このような視点を一つの切り口として、芸術と社会の関わりが強まる手だてを今後も継続して考える。

参考文献リスト

- 日本経済新聞社編 『私の履歴書 第三集』 日本経済新聞社、1960
- 笠原潔編著 『世界の芸術文化政策』 放送大学教育振興会、2008
- 小林進編著 『アートビジネス 文化政策の現場から』 雄山社、2012
- 堀内克一著 『地方文化再生の道 今なぜ文化支援なのか』 公人の友社、2000
- 日本音楽教育学会編 『音楽教育の未来』 音楽之友社、2009
- 武濤京子監修 『クラシック音楽マネジメント～音楽の

感動を届ける仕事〜』ヤマハミュージックメディア,
2011

総合研究開発機構『アートマネジメントと文化政策』全
国官報販売組合, 1998

秋元雄史, 安藤忠雄ほか著『直島 瀬戸内アートの楽園』
新潮社, 2009

参考・引用URL

[http://setouchi-artfest.jp/images/uploads/pdfs/
Setouchi_Triennale_2013_plan.pdf?phpMyAdmin=gN
jNmhVJRLYT7iuP9yuy4WUpBx3](http://setouchi-artfest.jp/images/uploads/pdfs/Setouchi_Triennale_2013_plan.pdf?phpMyAdmin=gNjNmhVJRLYT7iuP9yuy4WUpBx3)

[http://www.geidai.ac.jp/geidai-tuusin/timecapsule/
o5.html](http://www.geidai.ac.jp/geidai-tuusin/timecapsule/o5.html)

[http://www.cam.hi-ho.ne.jp/kousaka/wagner/122nd/
yamakou.htm](http://www.cam.hi-ho.ne.jp/kousaka/wagner/122nd/yamakou.htm)

<http://ja-am.org/soumokuji.php>

[http://www.cao.go.jp/sasshin/kaigi/honkaigi/d4/
pdf/s1-1.pdf](http://www.cao.go.jp/sasshin/kaigi/honkaigi/d4/pdf/s1-1.pdf)

[http://www.toppanhall.com/facility/begin/index.
html](http://www.toppanhall.com/facility/begin/index.html)

<http://www.roushikyo.or.jp/contents/>

<http://www.hosp.go.jp/~osima/shiptime.html>

